

05 加藤常昭積義の感想

キリストの教会 大甕キリストの教会牧師 館野 真
牧師：5か月 説教塾・セミナー初参加

積義 (exegesis) とは、聖書の「内から外へと」意味を抽出する作業で、逆に聖書の「外から内へと」意味を読み込もうとする作為的な解釈 (eisgesis) を避けることが重要であるというのが、私のこれまでの理解であった。しかし、exegesis にせよ eisgesis にせよ、説教者が御言葉の「外」に立って解釈を試みているという点では、どちらも同じことをしていると言える。積義とは、そのような人間から 御言葉への働きかけなのだろうか。加藤常昭先生の積義を拝聴して、積義とは、根本的に逆の方向で行われるものだという事に気付かせて頂いたのではないかと感じている。積義とは、御言葉から人への働きかけなのである。

加藤先生の積義は、御言葉が語る物語の「中」に自らを置き、そこで語られている伝道者マタイのメッセージに傾聴し、その意味を問い続けるものだと感じた。主イエスと徴税人や罪人が共に食卓に着くという一つの出来事が、“躍動感”にあふれた“事件”であるとの加藤先生の解釈が特に印象的であった。それはまさに「ιδ οὖ: 見よ」と言うマタイの言葉に応答して説教者がその事件を目撃し、その証言をいきいきと語って下さったことに、私は不思議な喜びを覚えた。深い学問的考察、多くの聖書学者、神学者、注解者との対話に裏打ちされた説得力を伴う加藤先生の積義によって、私はマタイが語る世界の中に引き込まれたように感じた。

また、加藤先生はあくまで説教者として、説教のために、積義をされているということを感じた。セミナー参加者との対話において加藤先生が強調されたことの一つとして私の印象に残っているのは、主イエスと罪人との食卓において説教者が“最も積極的にとらえる”べきことは“罪人の共同体としての教会の具体的な姿”であり、それは“現代の教会が生きて行く基準”となる、という解釈である。私は、加藤先生のこれらの言葉の背後に、会衆への配慮というバックボーン（と不思議な穏やかさ）を感じた。この点で、御言葉の積義はあくまで会衆のため（と共に？）に行うことであって、私がこれまでに行ってきたであろう、説教者の知的好奇心を満たす作業に終始するものであっては決してならない、と反省させられている。

この文章を書いている最中にも考えさせられていることであるが、私が本セミナーで生成した説教には、主イエスが新しく創造された罪人の共同体としての教会への共感と、その主イエスを通して現れた神の偉大な御わざへの驚嘆が欠けていた。教会の存在の根本に関するこれらのことが、加藤先生の積義の中で強調されていたのにも関わらずである。私の感性は、加藤先生が強調された御言葉の真実を聞き流してしまった。私の積義のあり方には、どこか、会衆のために自らを賭けていない説教者としての甘え、また神様の御言葉の中に身を投じることを恐れている心の迷いがあるのではないか。説教者として、説教に自分を賭けてゆくということは、どういうことなのだろうか。加藤先生から積義のあり方についてお手本を示して頂いてから、そのようなことを心に問いかけている。